

はじめに

学長 鈴木 多加史

平成3年の大学設置基準のいわゆる「大綱化」に始まった大学設置についての規制緩和以降大学の数が激増し、大学生の数も大きく増えたが、その一方で18歳人口は減少を続けたため大学進学率は上昇を続けた。その結果わが国もマーティン・トロウの発展段階説によるユニバーサル（普遍化）段階に入ったのである。それに伴って多くの大学において入学生の学力や勉学意欲にもさまざまな問題が生ずるようになっており、多くの大学で教育の質の維持・向上に努力しなければならない状況が生じている。各大学においてさまざまな努力が続けられているが、文部科学省もかねてから「大学教育高度化推進特別経費」を予算計上し、大学の努力に対して補助金を与えることによる教育の高度化の促進を図ってきた。

本学は平成15年度に「体験に基づく発見的・自己開発的学習」というテーマで文部科学省の補助金を得て「特色ある教育」を実施して以来、平成18年度までこのテーマで補助金を得て「特色ある教育」を実施し、その成果を公表してきた。本報告書は引き続き平成20年度に実施した「特色ある教育」の記録で、「体験に基づく発見的・自己開発的学習」の報告書としては第6集に当たる。

追手門学院は1888年に創立された大阪借行社附属小学校から出発しており、2008年に学院創立120周年を迎えた。現在では幼稚園、小学校、中・高等学校、大学・大学院を擁する総合学園に発展している。学院創立120周年を機に、創立以来の学院の教育理念を「独立自強・社会有為～自由と調和の人間教育をめざして～」に集約した。創立以来、自ら学び、実践して社会に貢献することを目指してきたことを明示したのである。「体験に基づく発見的・自己開発的学習」はまさにこの教育理念を実際の教育面において具体化したものであるといえよう。本学はこういった学習を通じて、学生諸君が自ら大きく成長することを期待しているのである。

本年度の報告書では、各教員が独自に実施してきた学習の成果を（Ⅰ）に示した。その成果を共有化し、さらなる向上を図るために広く各方面で読んでいただきたいし、また忌憚ないご意見をお寄せいただきたいと考えている。さらに（Ⅱ）には社会貢献としてさまざまな形で対外的に活動を行った成果を示した。くわしい内容についてそれぞれの報告をお読みいただきたいが、報告はプロジェクトに参加した学生諸君主体で行っているものが多い。ここでも「体験に基づく」学習がなされたのである。

こういった地道な教育を積み重ねることで本学の教育の質の向上を図っているのであるが、それは一朝一夕に出来上がるものではない。今後も地道にこういった努力を続けていくことが必要であることは論を待たない。重ねて努力を続ける所存であるので、本報告書をお読みいただいて、広く各方面から本学における今後の教育・研究両面の展開に対してご厚意あるご叱正とご支援を賜ることを期待している。